

特集 「サルコイドーシス 診断と治療Update」

巻 頭 言

京都府立医科大学大学院医学研究科

皮膚科学

加藤 則人



医学を含む生命科学や生物工学，情報工学などサイエンスの進歩は，私たちの生活を大きく改善させています．疾患の病態が詳細に解明され，特定の分子の働きを阻害することでこれまで難治であった疾患が劇的に改善することを，臨床の現場でも日常的に経験しています．一方で，一つの疾患の病態がhomogeneousではなく，人種や年齢，環境などさまざまな要因によって病態に関わるサイトカインなどの分子病態が異なる疾患も少なくないことが明らかになってきました．病態がheterogeneousで，しかもその疾患に奏効する治療法が多く開発されると，目の前の患者にどの治療法を選べばいいか，どの薬とどの薬を組み合わせればいいのか，が新たな課題になります．つまり，これまでの“Try and error”，“one-size-fits-all”のアプローチから，遺伝的背景，臨床的因子やバイオマーカーのデータなどさまざまなデータを解析して患者を層別化し，個々の患者に最適な治療を選択する時代に代わってきています．

サルコイドーシスは，肉芽腫性病変の形成を特徴とする全身性の炎症性疾患です．本特集号の藤岡数記先生の総説によると，本疾患の最初の報告は1869年とのことで，京都府立医科大学が栗田口の仮療病院で西洋医学の診療と教育を

始めた年の数年前に遡ります．その後150年あまりを経て，いまだに原因は明確ではないものの，サルコイドーシスの臨床像，病態や治療法などに関する研究は進歩を遂げ，生物学的製剤を含む新たな治療法の開発が進んでいるようです．

サルコイドーシスの病変は多臓器におよぶため，多くの診療科が連携して一人ひとりの患者を診療することが重要です．また，患者が最初に受診する診療科もさまざまです．医学・医療に関わる多くの方に本疾患に関する最新の情報を届けるべく，本特集号では「サルコイドーシス 診断と治療Update」をテーマにしました．京都府立医科大学大学院医学研究科・免疫内科学の藤岡数記先生には「サルコイドーシスのオーバービューと免疫学的病態」，同・皮膚科学の浅井純先生には「皮膚病変」，同・視覚機能再生外科学の永田健児先生には「眼病変」，同・循環器内科学の白石裕一には「心病変」，京都府立医科大学教育センターの金子美子先生には「肺病変」と，本学附属病院でサルコイドーシスの診療に携わる各領域のエキスパートの先生方に，それぞれの分野の最新のトピックスを中心に解説していただきました．本特集に書かれたサルコイドーシスに関する最新の情報を日々の診療に役立てて頂ければ幸いです．

